

# 西表島古見の結願祭と狂言

波照間 <sup>はてるま</sup> 永 <sup>えい</sup> 吉 <sup>(注1) きち</sup>

## 1. 古見の結願祭の儀礼過程

結願祭は、八重山では一般にキチィガン、キチゴンなどと称され、一年の願の成就を神に感謝し、この一年にかけられた諸願を解くための祭祀である。と同時に、来る年の豊穰を祈願する祭りとしての性格も付与されているように受け止められている。なかには石垣市登野城の例のように、十二年ごとに行われる地域もあるが、それは後の変改であって、本来的には毎年行われるべきものであった、と思われる。

古見の結願祭はかつては、旧暦6月のプーリィ（豊年祭）、同10月のシチィ（節祭）、同12月のタナドゥリィ（種子取り祭）などとならぶ、村をあげての大きな祭礼であった。しかし、近年は村の過疎化が主因となって、1984年から1991年の8カ年間の奉納芸能の中断に端的にみられるように、往時の盛大さはみられなくなっている。ただ、この8年間の中断の際にも神女の御嶽での祭祀だけは執り行われ、結願祭そのものは続けられている。

古見の結願祭は旧暦2月のユーニンガイ（世願い＝豊穰祈願祭）とセットになっており、ユーニンガイが行われると結願祭も確実に行われなければならないとされている。ミジィニ（水の兄）の日に始まり、金の日に終了するという。1993年の結願祭は10月10日に行われたが、この日はキヌトゥ（木の弟）にあたっていたという。郷友会の参加のための日程調整の結果である。結願祭の変容の一つの具体面である。

古見の結願祭は、まず神女・チィカサのウッカソ（御嶽）での祈願から始まる。結願祭当日の朝、8時過ぎにピニシィウッカソのチィカサを勤める仲本セツさん宅に村の神女（現在神女のいない御嶽ではティジィリィビと称される男性神職）が集まる。一同が参集したところで、御嶽の祭祀で供えられる供物（ハナグミ＝花米、ミシャグ＝神酒、グシ＝泡盛の神酒、カウ＝線香など）が配られる。その後、一同で結願祭を迎えた果報を喜びあい、来る年の豊穰を祈

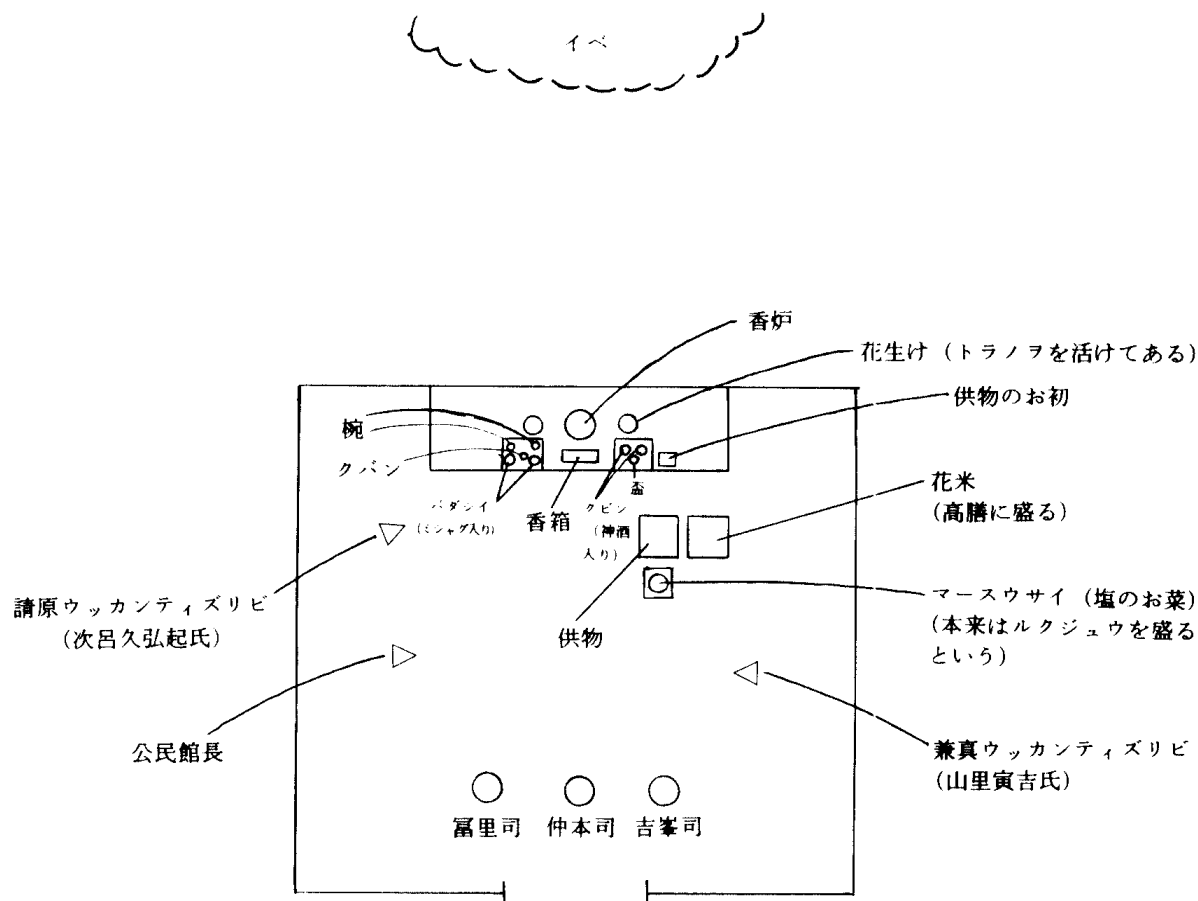
る挨拶を取り交わす。この時は、まず、村の神女で一番の年長者で、指導的な立場にある富里サカイさんがウカウッカン（請原御嶽）の男性神職者で、村の諸祭祀で中心的役割を担っている次呂久弘起氏に向かい上記の趣旨のことばを述べ、次いで次呂久氏が神女らの一年の働きに対しお礼を述べ、来年の豊穰を祈っている旨の返礼の言葉を述べる。

仲本家でのこの儀礼がすむと神女たちは自分の家に戻り、それぞれが齋く御嶽での祭祀のための準備を整え、すぐに御嶽へ向かう。御嶽に入るとウッカニヤ（拝み屋）に上がり、供物の包みを神棚の上において、簡単に合掌したあとウッカニヤ内部の清掃をする。清掃をおえると、神棚の香炉の清め、花生けの水の交換などをおえたのち、供物を神棚に配置する。そこで神女は神衣装を着け、結願祭の神祈願・拝礼を行う。キダスクウッカン（慶田城御嶽）の富里サカイ神女とピニシウッカン（平西御嶽）の仲本セツ神女は同一のウッカニヤ内にそれぞれの御嶽の神棚を設けているため、それぞれの御嶽の神への拝礼がすむと、互いに向かい合い、結願祭を迎えた村の豊穰を喜び、来る年も豊穰であってほしいという旨の口上をのべあう。そしてそれぞれの御嶽の神棚に供えたミシヤグ、グシのおながれを交換して飲む。この時も富里神女の方が先で、仲本神女は後になる。

御嶽での祭祀はこれで終了となり（午前10時頃）、神女たちは自宅に戻る。

結願祭の芸能の奉納はウカウッカン（請原御嶽）の神庭を舞台に行われる。12時前に各御嶽の神女らがウカウッカンのウッカニヤに上がり着席すると、ウカウッカンのティジリビの次呂久弘起氏は祈願の準備にとりかかる。神女らが白い神衣装をつけ、拝礼の準備がととのったところで、一同でウカウッカンの神棚に向かって拝礼・祈願の儀礼を行う。この後、公民館長がウッカニヤに入り、供物の料理を開き神棚の前の床に配列する。そのあとティジリビと公民館長らの男衆がユーパー（四拝）の拝礼を行う。そのあと神女、男性神職ほか男衆もそろって一同で拝礼を行う。これで御嶽の神への拝礼は終わり、公民館長より神棚にお供えした供物のグシのおながれと健康を象徴するマースウサイ（真塩お菜）がまわされる。この時、次呂久弘起氏よりカニマウッカン（兼真御嶽）のティジリビである山里寅吉氏へ、結願祭を迎えた喜びと来る年の豊穰を願う趣旨の口上が述べられ、山里氏も同趣旨の返礼の口

上を述べる。次いで山里氏と公民館長の間でも同じ儀礼が行われる。その後、一同は互いに向かい合い、上記の趣旨の挨拶を行う。これが済むと神棚の前に供えられた供物の料理のハチィ（お初）が小皿に取り分けられ、先ず神棚に供えられ、一同にも振る舞われる。ここから、一同、歓談となる。（図1参照）。



〈図1 請原御嶽での祭儀の時の座図〉

12時30分頃、奉納芸能が始まる。先ずは奉納芸能の演者一同がミルク節、ヤーラーヨー節の音曲に合わせ、御嶽の神庭に入場する（一般にスナイといわれる）。するとすぐに、イヤー、イヤーの掛け声で棒術の一団がミナカ（神庭）に入り、ミナカを一巡する。そのあとミナカで棒術の芸能が演じられる。棒術の芸能は二人一組で、ティンバイ、三尺棒、三尺棒と槍、三尺棒と薙刀、一同揃っての各組での打ち合い、その後、左右の位置を変えて再び上記の演技が繰り返され、終了となる。

ミナカの芸能の棒術がおわると、舞台の芸能となる。舞台での芸能は、先ずザーピラキィ（座開き）として「カギヤデフウ」が演じられる。次いで長老夫

婦（ンヌ）とその子孫の一同（フーマー）が登場し、御嶽の神に芸能を演じ、奉納するという劇仕立ての「長者」となる。その後、次々に芸能が演じられるが、その演目は「ゆがふ口説」（舞踊）、「ターカシ（田耕）狂言」（狂言）、「恩納節」「鶴亀節」「古見の浦節」（以上、舞踊）、「カザク（鍛冶工）狂言」（狂言）、「干瀬節」（舞踊）、「亀組」（狂言）と続き、最後は御嶽のミナカでの二頭の獅子による「獅子舞」で終了となる。（1993年の演目）

芸能が終了すると、すぐに後片付けとなり、ウッカナーに着座していた神女や男性神職者らも解散となる。その後、ミナカでくるま座となって、古見に住む人々と石垣市などに住む郷友会の人々で歓談して時を過ごす。

## 2. 結願祭の狂言

古見の結願祭の奉納芸能の舞台・サンシキキは、ウカウッカンのウッカナーに向けて設えられるが、沖縄各地にみられるバンク（舞台）のように地面から高く持ち上げる形式ではなく、十数センチの高さのブロックを土台としてその上に畳を敷いたものである。舞台の後背部は幕で仕切られ、後方はブドゥリザー（踊り座）と称され、楽屋に相当する空間である。幕のすぐ後ろには机、腰掛け、音響施設がセットされ、ジューピトゥ（地謡いの人＝音曲担当者）の席が設けられている。ミナカには筵やビニールカバーの敷物が敷かれ、村人の見物席となっている。（図2参照）。

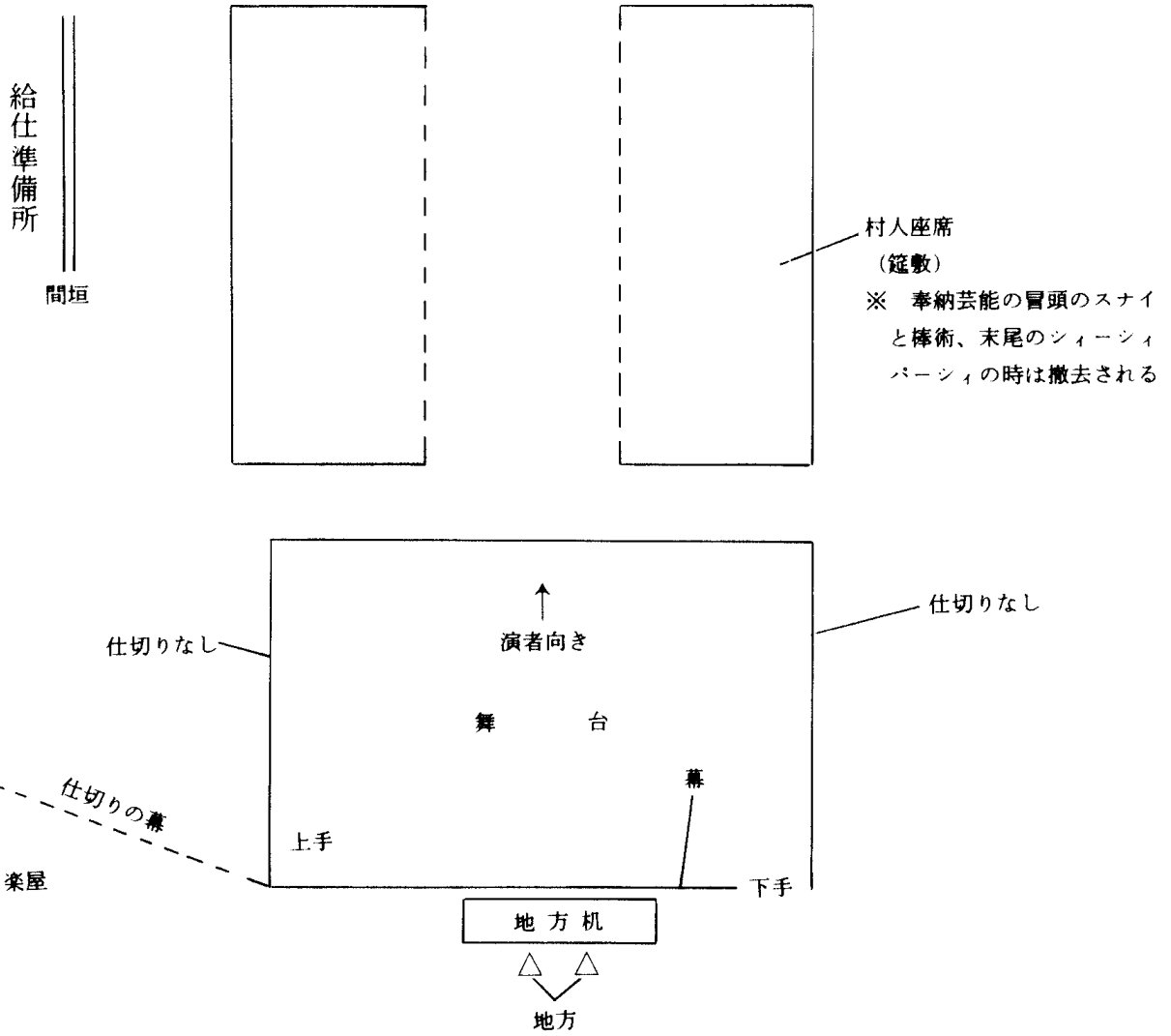
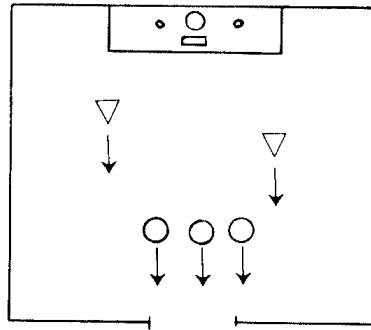
以下、本稿では、古見の結願祭の芸能のうちリーヌキョンギン（例の狂言）と称される芸能についてその概要を記述する。

古見の結願祭のリーヌキョンギンとして現在演じられているのは、「長者」（ンヌマーフマー）、「ターカシ」（田耕し）、「カザク」（鍛冶工）、「カミクミ」（亀組）の四番である。そのうち「長者」と「カザク」は八重山の他の地域でも演じられているが、「ターカシ」と「カミクミ」は古見固有のキョンギンである。

### 1) 「長者」

「長者」は沖縄各地の村芝居で行われる「長者の大主」系統の芸能である。長寿と富貴万福の長者夫婦が、我身の幸福を村の神に感謝して、一緒に登場し

ししいべりりり



〈図2 請原御嶽での奉納芸能の時の配置図〉

た子孫に様々な芸能を演じ、奉納させるものである。

長者の扮装は黒朝衣にミンサーの帯を締め、頭は黒い布の被り物で覆う。眉は白糸のつくり物を付け、頬および鼻下そして顎から長い白髭（前屈みになると帯のあたりまで垂れる）をつける。黒足袋をはく。右手には金色の扇子を広げ持ち、左手には杖をついて、前屈みの状態で所作を行う。媼は、小さな文様を染めた紅型衣装を打ち掛けにつけ、白足袋を履く。頭には老婆風に、マーニ（クログ）のシュロ毛の繊維で作ったかつらをつける。子孫たちは自分の演ずる芸能の扮装のまま登場する。

下手から登場した長者とその子孫一同は舞台を一巡し、長者夫婦は下手手前で椅子に腰掛ける。子孫は幕の前に横一列に並んで着座する。先ず長者が一同の者に芸能を演じ、奉納するよう指図すると、最初に「御前風」が踊られる。子孫の芸能の披露に対し、長者は「ユーシャン クワンマグワスチャー」（でかした、子や孫たちよ）と賞賛の辞をかける。そして又、子孫の者に芸能を披露するように命じると、年下の子孫から舞台に出て踊る。このパターンで長者の子孫全員の芸能が展開されるのである。「長者」で奉納される舞踊・狂言は以下の通りである。「御前風」「ナチジン（今帰仁）」「ミンヨウミン（耳よ耳）」「テンヨー」「馬節」「イシャドーネ」「マンガニスツツァ」「ジョンカネー」「一番狂言」「二番狂言」「バーチ（おばさん）」。これらが終了すると長者夫婦と子孫一同は舞台を一巡して下手から下がる。

## 2) カザク（鍛冶工）

農作物の豊穰を予祝する狂言である。しかし、直接そのことをいうのではなく、農作業のための道具が如何に立派に作られたかを言うことで、それをなすのである。

カザクは竹富島の種子取り祭で演じられるのが有名であるが、古見と小浜島でも結願祭の「例の狂言」として演じられている。竹富、古見、小浜の「カザク」は、内容的には同一である。しかし、古見と竹富のものを比較してみると、劇中、鍛冶工が述べる「カザリグチィ」（飾り口、鍛冶神への祈願の言葉）が竹富のものに比べると短くなっている点、竹富のものには見られない、後述の、滑稽を狙った加那と祖良のやりとりがある点、竹富のものが歌を劇中で歌うのに対し、古見のものにはそれが無い点など、幾つかの異同も見られる。古

見の「カザク」は古見の方言で演じられる「<sup>(注2)</sup>島狂言」である。

登場人物の扮装は、鍛冶工と伊武戸は黒朝衣に黒い帯を締め、黒足袋を履いて登場する。その下役の加那と祖良は最初から白ズボン（ステテコ）、白襦袢にミンサーの帯を締め、水色の布でたすきを掛け、日本手拭いで「上げ結び」（むこう鉢巻き）に鉢巻きを締める。足は白黒縦格子の<sup>(注3)</sup>脚絆を巻き、黒足袋を履く。1人はふいごを担ぎ、1人は鉄槌を担いで登場する。劇の途中から鍛冶工と伊武戸は着物を取り、白ズボン（ステテコ）に白ジュバン、ミンサーの帯にたすき掛け、黒足袋の衣装となる。

狂言の内容は、仕事（農作業）を割り当てられた伊武戸が、道具が少ないので、鍛冶工に新たに道具を作ってもらおうようお願いするところから始まる。鍛冶工は伊武戸の頼みに応じ、伊武戸とその下役の加那と祖良を引き連れ、鍛冶にとりかかる。先ず始めに鍛冶場を清掃し、鍛冶の神にカザリグチを唱え上げる。一同で神にお供えした神酒のおながれを戴いて、それから作業にとりかかる。途中、鍛冶工と伊武戸、加那、祖良とのやりとりがある。そして、無事に鍛冶を終えて帰途につくというものである。

この狂言は「例の狂言」であるが、滑稽味を前面に出したものとなっている。そのなかでも、鍛冶工が打ち上げたばかりの鍬を伊武戸の手に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶屋の両の耳をつかまえる部分と、見事に打ち上がった道具を讃えて、加那が「この道具であれば、2、3日もかかる仕事でも1日で終わる」といったのを受けて、同様に道具を讃えようとした祖良が「この道具であれば、一日で終わる仕事も2、3日掛かる」と逆に言い違えて、鍛冶工に叱られるところが、この狂言の笑いのポイントとなっている。

### 3) ターカイシ（田耕し）

ターカイシは古見独自のキョングンで、結願祭のみに演じられるものである。登場人物は、村の総代役とその使いの者3人（カマダー、ツクリャー、マツァー）である。

総代の扮装は、黒地の着物に帯をしめた平服である。一方、使いの者の3人は、白ズボンに白シャツを着け、紫色の布でタスキを掛ける。頭には日本手拭いでむこう鉢巻きを締め、脚には前記の脚絆を巻く。

セリフは古見の方言で、日常会話と同じように語られる。いわゆる「島狂

言」である。

狂言の内容は、村の総代が使いの者3人を呼んで自分の田の荒打ちをさせる。初めは真面目に働いていたが、そのうちに2人の者はなんのくんのといっ  
て怠け、昼寝を決め込んでしまう。それでも真面目に働いていた1人が、田の  
中から金塊を掘り当てる。怠け者の2人が自分たちにも分け前があるものと主  
張したため、3人は総代に決着をつけてもらうよう申し出る。事情を聞いた総  
代は、3人のうちで一番歳かさの者がこの金塊の所有者とするという。それぞ  
れ自分が歳かさであることを言うために、マツァーは、自分はこの村が茶碗一  
つにも満たない時から生まれている者だという。これに対しツクチャーは、自  
分はこの島の天と地とがまだ分かれないうちから生まれているのだという。最後  
に返答することとなった、真面目に働いていたカマダーは、自分の嫡子はこの  
2人の者と同じ年だと答える。それで総代はカマダーが最年長だとして、金塊  
をカマダーに渡す。怠け者の2人は幸運を逃した腹いせに、互いに罵りながら  
下がっていく、というものである。

#### 4) カミクミ (亀組)

「亀組」は古見の結願祭の舞台の芸能の最終演目で、古見にしか伝承されて  
いない。登場人物は武人の扮装をした「頭大主」(男性)1人と、海底の他界  
の「女神」1人の、2人だけである。

「亀組」は全体が組踊の影響の下に成り立っており、これが古見地生えのも  
のではないことを推測させるが、これが何処から入り、何時頃から上演された  
かは不明である。周辺の村に類似の芸能はなく、貴重である。さらにこの狂言  
は内容的にも、沖縄の伝統的かつ固有の観念であるニライカナイの豊穡他界観  
を見事に表現しており、この点でも注目される。

頭大主は、釣りへ赴く態で、青布(風呂敷様)の被り物で頭を覆い、紫のナ  
ガサジ(長手巾)を鉢巻きとして締め(鉢巻きは腰まで垂れている)、額には  
金色の楯形の飾り物(長さ約25センチ)を付け、両こめかみから左右の胸先  
まで赤色の長方形の布を垂らす。黒色の着物を着流しにつけ、右肩を脱いで下  
着の白襦袢をみせ、その上から赤色の幅広の布でたすきをかけている。着物の  
裾は、腰のあたりで左右をつまみたくし上げて、あずまからげ風にし、白黒縦  
縞の脚絆がみえるようにする。黒足袋を履く。右肩に釣り竿(長さ約120セン



チ)をかけ、右手で支える。腰には大刀一本を差し、柄を左手で押さえた恰好で登場する。

ニライの女神は、頭飾りは八重山の女踊り一般の飾り物であるチィチィバナ(頂花)、マイカンガン(前鏡)、スババナ(側花)、バサラ、チィユダマ(露玉)、ナミカンザシィ(波髪差し)などを付けて出る。鉢巻きは赤色のナガサジ(長手巾)である。衣服は、下に市松模様の着物を着け、その上に紅型の打ち掛けをウシンチーで着けるが、右肩は脱いでいる。足には白足袋を履く。劇の展開のなかで、五穀の種子の入った籠を両手に捧げ持つ。

セリフは全て、沖縄各地で演じられる組踊の唱えのように詠じられる。

狂言の内容は、頭大主がうららかな好天にさそわれ、魚釣りに浜に出て釣り糸を垂れる。すると当たりがあって、大きな魚がかかったと思い竿を上げてみると、それは魚ではなく亀であった。釣り上げられた亀は女に変化し、自分はこの世のものではなく、海底の他界(ニライ)の神と述べる。そして女神は、人間の世界に豊穡をもたらすためにやってきたという。頭大主は喜んで女神に向かい合い、女神が捧げ持つ五穀の種子の入った籠をいただいて、村へ帰る、というものである。

以下、舞台上の展開を記す。三線と締め太鼓の演奏(組踊りの手ごとに類する)で頭大主登場。そして「ディョウチャルムヌヤ(出てきたる者は)」と組踊冒頭の名乗りで、自らが「頭大主」であることをつけ、「今日の良き日に釣りをする」と述べる。再び三線と締め太鼓の演奏で舞台中央へ移動する。この時、足運びは、右に一步大きく踏み出し、次いで左足を右足の方へ運ぶという形で、これを左右交互に行う。従って歩行線はジグザク型となる。舞台中央に到ったところで、男は釣り糸を幕(上手側)の方へ投げる。するとすぐに当たりがあり、幕(上手側)から五穀の種子の入った籠を両手に捧げた女神が出てくる。男が何者であるかと問うと、女神は自分こそが豊穡の国なるニライヤ(ニライカナイ)の神であることを告げ、これから人間界に豊穡をもたらすところであったと語る。頭大主は畏まり、女神の捧げ持つ五穀の種子の入った籠を頂き、正面になおり「ウートートゥ」(おお、尊い)と感謝の言葉を述べ、再び女神と向かい合う。女神は頭大主に対し、稲の栽培法を教え、生産に励み、首里の国王への貢納を立派に勤めるようにと諭す。頭大主は再び正面に向き、早

く村に戻り、この果報を皆にしらせよう、と述べる。そして、三線の伴奏にのせて歌われる「伊計離節」にあわせ、女は舞台を上手から下手へ手踊りをしながら回り退場する。頭大主は籠を捧げた姿勢で、途中まではその女を案内するように先に立ち、後は女に付き従うように後ろになって退場する。

○「伊計離節」歌詞

- |   |        |        |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | みりくゆぬ  | ヨーハーリ  | 弥勒世の   | ヨーハーリ  |        |
|   | なうるゆぬ  | ヨーハイヤー | 稔る世の   | ヨーハイヤー |        |
|   | ぬしいでむぬ |        | 主であるから |        |        |
| 2 | きゆぬ    | ひぬ     | ヨーハーリ  | 今日の日の  | ヨーハーリ  |
|   | くがにひぬ  | ヨーハイヤー |        | 黄金日の   | ヨーハイヤー |
|   | まさる    | ひに     |        | 勝る日に   |        |

### 3. 古見の結願祭の組織

現在の古見の結願祭の芸能の組織は、ディーピトゥ（地謡いの人＝音曲担当者・男性）3～4人、ブドゥリィザー（踊り座）の人やキューゲン（狂言）座の人男女十数人、棒術の演者八人（男性）とジンバイ（膳配り＝給仕役・男性）といったものである。以前はクバンガカリ（神饌係）もあったという。これらの諸役は、年令階層によって分担されていたが、現在は村の人口が減少したため、小学校入学前の幼児から小・中・高校の児童生徒を始め、村の小学校に赴任している先生、郷友会の会員及びその子弟も加わって運営されている。

結願祭の芸能の稽古は祭りの10日程前より手がけられるが、祭りの前日は、公民館に集まり、シクミ（仕込み）が午後4時頃より行われる。芸能の指導は村の指導的立場にある年配者や先輩格の者が当たる。結願祭の開催費用は村の公費から支出される。芸能に要する部分も同じである。石垣市の郷友会などでの芸能の稽古などに関する経費は郷友会の補助の他、個人の負担もある。古見の年中行事のうちの大きなものは、石垣市他の郷友会の援助なしには遂行が困難な状態にあるが、結願祭に関わる諸芸能の実演についても同様である。

## 4. 結願祭の狂言資料

ここに紹介する狂言の詞章は、古見出身の大底朝要氏の「古見の狂言」を土台としている。本文書は古見の結願祭でリーヌキョンギンとして演じられる上記4番の狂言の詞章を記した手書きの本（草稿）である。本稿の形は、同書の詞章を大底氏の朗唱した詞章と大底氏の指示によって部分修正したものである。同書はカタカナをベースに一部漢字を用いているが、本稿ではカタカナの部分をひらがなにおきかえた。また、宛漢字や送りがななど、大底氏の「古見の狂言」を一部改めた部分がある。なお、本稿の詞章原文の部の（ ）内は「古見の狂言」ではルビとして示されたものである。訳は大底氏からの聞き取りに基づいて筆者が新たにつけたものである。各狂言の末尾に大底氏からの聞き取りに従って簡単な語注を付けた。中舌音の表記は大底氏の稿本に従った。狂言詞章の音声表記および完全な「台本」の作成については、付属研究所の行っている「西表島古見の伝統文化の調査研究」の報告書にゆずりたい。

### 1) 長者

長者	我みや くぬ村 百二十歳（ひゃくはたち）なる	私はこの村の百二十歳になる
		る
	長者（ちょうじゃ）ぬ うふ	長者の大〔主〕
	ありがた 我 とうじぶとう	あり難くも 我が夫婦は
	どーがふゆ 給ぼーてい	健康の果報を戴いて
	まんまんぬ しでいがふーだやーびる	万々の至福でございます
	今日ぬ ゆかる 日に	今日の良き日に
	今日ぬ まさる 日に	今日の勝る日に
	子孫（くわんまぐわ）ぬ達（ちゃー）	子や孫達を
	ひきちりてい	引き連れて
	踊いはに しみてい	踊り跳ねさせて
	願い 叶わたる うふび あぎやびん ①	願いが叶ったウフピを上げ ます
	又 願ゆしや	又 願いますことは

つちまさい まさい  
 ②  
 年貢（にんぐ） とぅしあまてい  
 家敷（やしち）ぬ ③  
 ④  
 しら まちん んしる  
 ⑤ ⑥ ⑦  
 う願（にげー）だやーびる  
 まんまんぬ しでいがふーだやびる  
 うーとーとぅ うーとーとぅ  
 ——腰掛けてから——  
 子孫（くわんまぐわ）ぬちゃー  
 踊いはにしみてい  
 祝（ゆえー）しち あすび  
 ——子供達ノ踊り終エテ——  
 子孫ぬちゃ 宿に 立ち戻てい  
 祝しち 遊ば

土（又は年か）勝りに勝り  
 年貢も年（？）に余って  
 屋敷の優れ（？）  
 稲叢の真積みも据える  
 お願いでございます  
 万々の至福でございます  
 おお尊 おお尊

子や孫達よ  
 踊り跳ねさせて（して）  
 祝いして 遊べ  
 子や孫達よ 宿に戻って  
 祝いして 遊ぼう

### 〔語注〕

- ①うふびー未詳語。②つちー年か、という。③とぅしー未詳語。④すごいー優れか。「年貢を納め、余ったのが屋敷の周囲一杯に」という意とされる。⑤しらー稲叢。稲を収穫した後、屋敷内に円錐状に積み上げたもの。⑥まちんー真積み。稲を積み上げた物。沖縄諸島の方言でいうイニマゼン。⑦んしるー据える。設える。

## 2) 加治工（かざく）

伊武戸 我（ばん）どぅ 東大底家（あーるすきや）ぬ  
 ①  
 伊武戸ゆ  
 今日から また しくんがい  
 ②  
 くばらりぶるぬどぅ  
 ③  
 考いみりばー ばー ていでいよ  
 ④  
 道具（どぅんぐ） 少（すく）なは ありぶり  
 どぅ  
 加治工（かざく）ば ⑤  
 ⑥  
 道具ぬ ふついば うつあしみ

私が東大底家の  
 伊武戸です  
 今日からまた仕事を  
 配られておりますが  
 考えてみれば 私としては  
 道具が少なくありますので  
 （少ないので）  
 鍛冶工を見て（会って）  
 道具の口を打たせて

な—ていかつ かつみしみ

⑥ いでい立つ ⑦ すずんどらん やっていら  
⑧ ⑨

人並 (びとらなみ) に し—ぱらりるんがや—  
⑩  
でい

思いどろ かい あらぐゆ

——幕内に向かい呼びかける——

しじゃ しじゃ

——幕内から——

加治工 え— ぬ—でい かい あるぎゃ  
⑪ ⑫

内 (うつ) んかい 入 (び) りくわ

伊武戸 お— くゆなら しじゃ

加治工 ん— みしゃんさ  
⑬

ぬ—でい かい あるぎゃ 伊武戸 (いんとう)

伊武戸 お— さ—てい かいどろ く—さ  
⑭

しじゃ

加治工 ん—

伊武戸 今日 (きゅ—) から また

しくんがい くぼらりぶるぬどろ

考 (かなが) いみりば

我 (ぼ) ていでいよ

道具 (どうんぐ) 少なは ありぶりどろ

道具 (どうんぐ) ぬ ふつば うちたぶりでい

来さ しじゃ

加治工 ん— あいどろ やっすぬ  
⑮

ばな 人数 (にんじゅ) でいよ—

朝 (すとらんでい) な な— ぼ—ぼ—  
⑯

銘々に持たせて

(田畑に) 出ることができ  
たら

人並みにやっしていけるの  
では

とあって この様に歩いて  
います。

先輩 先輩

はい。どうしてこの様に歩  
いているのか

内に入って来い

はい。御免ください先輩

ああ。元気だろうな。

どうしてこうしているのか  
伊武戸

はい。このような訳できま  
した 先輩。

そうか

今日からまた

仕事を配られています

考えてみると

私としては

道具が少ないので

道具の口を打って下さいと  
来たのです 先輩

ああ そうだったのか

私の手下達は

早朝に銘々方々へ (散って)

手配（ていっばい）し ばらしきししてい<sup>17</sup>  
 我（ぼん）とぅ 新本家（あんでや）ぬ  
 加那（かな）とぅどぅ  
 いい 持（む）つ 人（びとぅ）でい<sup>18</sup>  
 残（ぬく）りぶる<sup>19</sup>  
 ぬぶり 相談（すだん）しーしてい 来どぅ<sup>20</sup>  
 すかはりるさ<sup>21</sup>  
 伊武戸 おー でいら だんてい ぬぶり<sup>22</sup>  
 相談（すーだん）しーしてい うーり<sup>23</sup>  
 聞（す）かひうりひり  
 ——加治工幕に入って出てくる——  
 加治工 相談（すーだん）ししてい きゃん  
 伊武戸 でいら だは 人数（にんじょー）<sup>24</sup>  
 ぬーでいどぅ あいうりりゃ<sup>25</sup>  
 加治工 んー だは 人数（にんじゅ）ぬ<sup>26</sup>  
 出でいき すー しずんどぅん やっていら<sup>27</sup>  
 我（ば）な 人数（にんじゅ）ん まーたき<sup>28</sup>  
 出でいき すー しずでい  
 ていぐみ しーしてい きーる<sup>29</sup>  
 伊武戸 さーてい でいら いー 人数（にんじゅ）<sup>30 31 32</sup>  
 加治工 あい だは せーから<sup>33</sup>  
 だーたんがどぅ うりくーよー  
 たるんぬん あうん<sup>34</sup>  
 つき すーり くんよーさ<sup>35 36</sup>  
 伊武戸 おー ばな せーから  
 前元家（まいばにや）ぬ 祖良（すら）  
 ていぐみ しーしてい きーる  
 加治工 さーてい でいら いい にんじゅ

手配して行ってしまつて  
 私と新本家の  
 加那とが  
 飯運び人として  
 残っている  
 行って 相談をして来て  
 （返事）を聞かせよう  
 はい では 急いで行って  
 相談をして来られて  
 聞かせて下さい  
 相談をして来たよ  
 では 貴方の仲間は  
 何と言ってらっしゃいます  
 か  
 おお 貴方たちの仲間が  
 出てきてするつもりならば  
 私の仲間も同じように  
 出てきてするつもりだと  
 段取りをして来たよ  
 さて ならば十分な人数で  
 す  
 ああ 貴方の所からは  
 貴方だけがやって来るのか  
 誰か連れも  
 付けて連れて来るだらうね  
 はい 私の所からは  
 前元家の祖良を  
 段取りしてきてます  
 さて ならば十分な人数だ

ばー ぬぶり すくり まちぶらば<sup>37</sup>  
 だんでい 来(き)ー 呼(やら)び  
 伊武戸 おー だー あい にびさり おーる<sup>38</sup>  
 びとらぬ  
 だんでい すくり まち うーりぶらな<sup>39</sup>  
 加治工 んー  
 ——加治工先頭に幕に入り、伊武戸、加治工、祖良、加那の順に出てくる。——  
 伊武戸 祖良(すら) くびんな 酒(ぐし)  
 入り持ち  
 加治工(かざこー) うんな むぬどら  
 好(す) きやりうる ゆんから  
 持(む) ちうりぶり  
 力(つから) ば つきしみ しみ おーらふ  
 すずんどらん やっていら  
 人(びとら)ぬ むぬらんま<sup>40</sup>  
 まし たぶりばい<sup>41</sup>  
 加治工・加那・祖良 あい したぶりばい  
 ——舞台一巡して——  
 加治工 とー くま  
 ——全員座る——  
 ——祖良は加治工に、加那は伊武戸に——  
 祖良 くゆなら しじゃ  
 加治工 ん みしゃんさー  
 加那 くゆなら しじゃ  
 伊武戸 ん みしゃんさー  
 加治工 さーてい きぬりゃ<sup>42</sup>  
 かずん しーみらなだら<sup>43</sup>

私は行って準備して待って  
 いるから  
 急いで来て 呼びなさい  
 はい 貴方はあんなに遅い  
 人でいらっしゃるから  
 急いで準備して待ってい  
 っしゃらないと  
 ああ  
 祖良は瓶子に酒を  
 入れて持ちなさい  
 鍛冶工はそんな物が  
 好きでいらっしゃるから  
 持って行っていなさい  
 力をお付けさせることがで  
 きるならば  
 他人の物よりは  
 上等に作ってくれるだろう  
 そのようにしてくれるだろ  
 う  
 さあ 此処だ  
 如何ですか 先輩  
 ああ 元気かい  
 如何ですか 先輩  
 ああ 元気かい  
 さて 長い間  
 鍛冶もしてみないものだか

加治家 (かざや) ん うまん かまん  
 しーりかーりどる  
 弟 (うとうどう) ④ 二人 (ふたれー)  
 つかみしていり

加那・祖良 おー

——全員で掃除のしぐさをする——

——加治工はふいごハンマー等を並べる——

加治工 あい 今日や

かまま つくしん ありどるぬ  
 ⑤ ⑥ ⑦

考 (かんが) いぶり むちうりきんよーさ  
 ⑧

伊武戸 おー さーてい 考 (かんが) いぶり

持 (むち) ちうりきーどる

出 (いだ) ひ うしりゃ 祖良 (すら)  
 ⑨

祖良 おー じゅー おいすなら  
 ⑩

——茶わん、酒の順に上げる——

加治工 んー

——受けとり酒をついでうやうやしく——

うーとーと

今日 (きゅう) ぬ かいびぬ 吉日 (きつにつ) な  
 ⑪ ⑫

大 (おー) かつ なーかつ  
 ⑬

すすさでい うりきば  
 ⑭

おーかま こーかま  
 ⑮

おーふくいぬまいや  
 ⑯

かに いび にはばん  
 ⑰ ⑱

びとら いびぬ まま

ら

鍛冶屋のここもあそこも

散らかっている

年下の二人は

(塵等) を掴んで捨てろ

はい

ああ 今日は

竈に供える物も有るのだから

ら

考えていて持って来て居る

だろうな

はい さて 考えていて

持って来て居る

出して差し上げなさい 祖良

良

はい どうぞ お差し上げ

いたしましょう

ああ

おお尊

今日の良き日 吉日に

大鍛冶 長鍛冶を

しようとして来てますので

大竈 小竈

大ふいご様は

鉄をくべ煮ても (焼いても)

一くべのまままで (焼け)



ふたいびぬ ままがぎ  
 あかんだ むつんだぬ ぐとぅ<sup>⑤9</sup>  
 ぴきぬばひたぼり とーとぅ  
 あんむつぬ ばだに  
 ぴからひたぼり とーとぅ  
 うーとーとぅ  
 ——金打ち台に三度かけてのんでから——  
 さーてい 伊武戸  
 今日(きゅー)や にんずんからどぅ<sup>⑥0</sup>  
 ていだい うりきーりしてい<sup>⑥1</sup>  
 んー だー 飲(ぬ)みしてい<sup>⑥2</sup>  
 ぱららってい まーひひしてい<sup>⑥3</sup>  
 ふき うし  
 弟二人(うとぅどぅふたれー)  
 金(かに) 打(う)ち  
 伊武戸 おー  
 祖良・加那 おー  
 ——酒をまわす——  
 加治工 今日や 暑(あつあ)ぬ 裸(ぱたが)  
 なりどぅ 仕事(すすさぐ)ん しらりる  
 ——伊武戸あいづちをうち、着物をぬぎ、たすきをする——  
 伊武戸 とー でいら うすんどー  
 加治工 にびさぬ  
 伊武戸 ——ふいごを押しながら——  
 ぶーばふ ぶーばふ ぶーばふ ぶーばふ<sup>⑥4</sup>  
 みーだかや<sup>⑥5</sup>  
 加治工 みーだ みだ  
 ぬすたる 金(かに)ぬどぅ<sup>⑥6</sup>  
 あな はいしゃ にーりゃ

二くべのままで  
 赤土 餅土のように  
 引き伸ばして下さい 尊  
 餡餅の肌のように  
 光らせて下さい 尊  
 おお尊  
 さて 伊武戸よ  
 今日(きゅー)は人数の分も  
 (奢って)準備して来ているではないか  
 はい お前も飲んで  
 ぱーっと(杯を)回して  
 ふいごを押しなさい  
 年下の者二人は  
 鉄を打ちなさい  
 はい  
 はい  
 今日は暑くて 裸にならな  
 いと仕事にならない  
 さあ では 押しますよ  
 遅いぞ  
 ブーバフ ブーバフ……  
 未だでしょうか  
 未だ未だ  
 どのような鉄が  
 こんなに早く煮えるものか

——伊武戸は「ぶーばふ」をくり返す——

とーとー にゃん にゃん さあさあ 煮えた 煮えた

——地謡にあわせて金を打ち、それが終わると加治工と祖良、加那は…… ——

祖良・加那 くーにゃん くーにゃん クーニャン クーニャン  
<sup>67</sup>  
 みんな まーるん ゆがみだつきんどう (鍬の) 耳の辺りが歪んで  
<sup>68</sup> いるので

じょーぶに りちたぼんなら しじゃ 立派に打って下さいませんか 先輩

加治工 だは あいやなだでいん お前達が言わなくても  
<sup>70</sup> しじゃな ちゃんとう みりどう わーりる 先輩はちゃんと見ておられる

——水に入れる仕草をし——

ばららー ばふ バララーバフ  
<sup>71</sup>

——確かめるように見てから——

いー まりたる かつ やっさー おー 立派に生まれた鍛冶  
<sup>72</sup> <sup>73</sup> <sup>74</sup> <sup>75</sup> (の品物) であること

とー また うし さあ 又 押せ

伊武戸 ぶーばふ ぶーばふ ぶーばふ ブーバフ ブーバフ……

みーだがや 未だだろるか

加治工 みーだ みだ 未だだ 未だだ

——しばらくしてから——

とーとー にゃん にゃん よしよし 煮えた 煮えた

——地謡にあわせて金を打ち、三人で——

くーにゃん くーにゃん クーニャン クーニャン

祖良・加那 さーてい しじゃ ふつぬ まーる さて 先輩 口(刃先)の  
<sup>76</sup> ゆがみだつきんどう 辺が 歪んでいるので

じょーぶに 打ちたぶんなら 立派に打って下さいませんか

加治工 だは あいやなだでいん お前達が言わなくても

しじゃな ちゃんとう みりどう わーりる 先輩はちゃんと見ておられる

		る
	——水に入れる仕草——	
	ばららばふ	バララーバフ
	——確かめてから——	
	いー まりたる かつ やっさ	おー 立派に生まれた品物 であること
	んー 伊武戸	さー 伊武戸
伊武戸	あー きさ きさ きさ ⑦	あー 痛 痛 痛
	——ふりおとして、加治工の耳をつかまえる——	
加治工	あが あが	あ痛 あ痛
伊武戸	あつあだら あつつあんでい すかひん おーりどろ す 火(ぴい)から むぬば いだひーしてい んーでい とらひうーるん	熱ければ 熱いと 聞かせて下されば良いのに 火から物を出して ほらと 取らせなさいます か
	あつつあだら 耳 かつまーぼどろ のーるでい ⑧	熱ければ耳を掴んだら直る と(言いますので掴みます)
加治工	あが あが あが 加治家(かざや)ぬ むのー 白々(すすい) ぶりどろ あいぶるでい すさぬや ⑨	あ痛 あ痛 あ痛 鍛冶屋の物は (熱い物でも)白々とし ていると 知らないのか
伊武戸	ふん あいどろ やりょうる	ふーん そうでございます か
	——左右にふりながら確かめてから——	
	いー まりたる かつ やっさ	おー 立派に出来た品物だ
	んー 加那	ほら 加那
加那	おー	おー
	——左右にふってみてから——	
	さーてい さーてい まりたる かつ やっさ	さて さて 見事にできた 品物であることだ

	うりがぎどらん やっていら	これであれば
	二、三日 (にさんにつ) がぎ すー すさぐ	二三日でする仕事であつても
	やらばん 今日 (きゆ) 一日 (びていん) がぎ	今日一日で
	すまだぎばらはりるんがやでい 思 (うむ) りるんゆ <sup>(80)</sup>	してのけることができると思われますよ
	しかいーとら <sup>(81)</sup> みーばいゆ <sup>(82)</sup> しじゃ	本当に 有り難うございます 先輩
加治工	んー 君達 (だは) ん あい 思 (うむ) りるん	おー お前達もそう思ひだろ
	さ	
	しじゃなぬ かい きむ入りば し <sup>(83)</sup>	先輩がこのように心を込めて
	打ちたぶりりばい <sup>(84)</sup>	打つてくれてあるからな
祖良	——左右にふつて確かめるようにみてから——	
	さーていさーてい まりたる かつ やっさ	さて さて 見事にできた品物であることだ
	うりがぎどらん やっていら	これであれば
	今日 (きゆ) 一日 (びていん) がぎ すー	今日一日でする
	むぬ やらばん	ものでも
	二、三日 かかり すまだぎばらはりるんがや	二三日かかってしおおせる
	でい 思 (うむ) りるんゆ	かなと思われますよ
	しかいーとら みーばいゆ	本当に有り難うございます
加治工	——ハンマーをふりあげておこり——	
	さーてい ぬーでい あいゆ <sup>(85)</sup> うるぎ <sup>(86)</sup>	さて 何と云うのだ こいつ
	しじゃなぬ かい あしみずば ながひ	先輩がこんなに汗水を流し
	きむいりば し 打ちうりる 道具 (どらんぐ)	心を込めて打つてある道具
	ぬ ふつば	の口 (刃先) を (評するに)
	今日 一日 (きゆびていん) がぎ すー	今日一日でする
	仕事 (すさぐ) ん	仕事を

二、三日 かかりどう す うるざ  
 ばー すぐ かざやぬ かなあいつつ<sup>87</sup>  
 うがまひとらはんば  
 祖良 みなぬ いーずぶんま<sup>88</sup>  
 ばんどら ばるはだつきんどら<sup>89</sup>  
 どーでいん ゆるひたぶんなーら しじゃ  
 加治工 ばるはんでい うむりるん  
 祖良 おー  
 加治工 しかーいとらゆ  
 祖良 おー  
 加治工 でいら ゆるひたぶるん  
 伊武戸 さーてい 今日や かずん し  
 ぶがりん おーりだつきんどら  
 ばー 先(まい)なり ぬぶり  
 湯(ゆー) 沸(ふ)かひ 待(ま)ちぶらば  
 いきさいぬ みつどう やりうーる<sup>90</sup>  
 うーり 茶(ちゃ) ぴとらちゃばんぬん  
 にきしてい わったら ぬばいどうやりうりゃ<sup>91</sup><sup>92</sup>  
 加治工 んー あいどう やっすぬ  
 今日や かずん し  
 かざやん うまん かまん  
 しーりかーりだつきんどら  
 ば うまぬ まーるぬ 道具 びゅんぐば<sup>93</sup>  
 しずみまるばひしてい くーけ<sup>94</sup>  
 だーんでい ぬぶり 湯 沸ひ 待ちぶり

二三日もかかってする(と  
 言うのか) こいつめ  
 俺が今 鍛冶屋の金槌を  
 拝ませてやろうな  
 今の言い分(言い方)は  
 私が悪うございましたから  
 どうぞ許して下さい 先輩  
 悪いと思われるか  
 はい  
 本当にか  
 はい  
 なら 許してあげよう  
 さて 今日 鍛冶もして  
 疲れておられるので  
 私が先になって行って  
 湯を沸かして待っているの  
 で  
 行きがけの道ですから  
 おいでになって お茶の一  
 碗でも  
 お上がりになって行かれたら  
 どうですか  
 あー そうであるが  
 今日 鍛冶もして  
 鍛冶屋も ここも あそこも  
 散らかっているから  
 俺がここの辺りの道具ピュ  
 ングを片づけて来る間に  
 急いで行って 湯を沸かし  
 て待っていないさい

——三味線に合わせて全員幕内に向かう——

伊武戸 かざこー 酔 (びー) どうるぬ<sup>95</sup>

鍛冶屋さんは酔っておられる

みすくみすく うとうむさな<sup>96</sup>

注意してお供しよう

——加治工以外全員退場——

加治工 いー ばー 酒 (ぐ) せー 残りだつきんどろ<sup>97</sup>  
飲んまるばへーな<sup>98</sup>

そうだ 俺の酒は残っているから 飲み干してしまおう

——三味線に合わせて踊る——

いー ばー 酒せー 飲みばん 飲みばん  
残りぶり ざーぶん ざーぶんでい<sup>99</sup>  
ばー くすなめー<sup>10</sup>

おー 俺の酒は 飲んでも飲んでも残っていて ザブンザブンと 俺の後ろ辺 (背中) を

すぶったらひねーなだつきんどろ<sup>10</sup>  
飲んまるばひしてい ぬぶり

濡らしてしまったから 飲み干してしまっ行って

伊武戸妻 (とろず) んがり  
ていだいしみれーなー

伊武戸の妻に (お酒を) 奢らせてやろう

——三味線に合わせて踊りながら——

伊武戸 伊武戸 みなどろ ぴーりくーどー

伊武戸 伊武戸 今 (漸く) 入ってくるぞ

### 〔語注〕

- ①東大底 (あーるすきや) — 演者の屋号を使う。演唱の際、大底氏は「うぶすくやー」(大底家)とした。②しくんがいー仕事。割り当てられた職。③ぶるぬどろー～いますが。「ぬどろ」は逆接の助詞。④ていー手。手の代わりを務める物で、道具。⑤みりー見て、即ち、会って。⑥なーていー「なー」は自分自分。銘々。「てい」は手か。⑦かつー数で、それぞれに。あるいは助詞で「～に」か。⑧すずんーことが。「すず」は筋で、こと、つもりの意か。⑨やっていらー接続詞。～であったならば。⑩しーばらりるー「し (為)+ばらりる (行ける)」で、やっていけるの意。⑪えーー感動詞。応答の際に用いられる他、驚きや怒り、不満の表現など様々な場面で使われる。⑫かいー副詞。このよう

に。⑬みしゃんさー「みしゃん」はよい。元気である。「さ」は終助詞で、～かい、～だろうね、の意を表す。⑭かいー⑫の「かい」と同じであるが、ここでは、先に述べた鍛冶工を訪ねる理由を指し、それをすぐあとに述べる展開を導く。⑮あいどう やっすぬーそうであるのだが。「あい」は指示代名詞。そう、そのようである。「どう」は強意の係助詞。国語の「ぞ」にあたり、連体形、名詞で結ぶ。「やっすぬ」は～であるが。「ぬ」に逆接の働きがある。⑯なーぼーぼーー銘々の仕事場。「ぼー」は仕事場という。方に当たるか。⑰きししていー～してしまつて。⑱いいー飯。御飯。ここでは昼の弁当。⑲ぬぶりー上り。ここでは、行つての意。⑳すかはりるさー聞かすことができるよ。即ち、返事できるよ、の意。㉑おーー感動詞。応答の際に用いられる。㉒だんでいー急いで。一刻も早く。㉓うーりーおいでになり、いらっしゃり。尊敬動詞。㉔だはーあなたたち。二人称の複数を表す。単数は「だー」。㉕あいー言つて。石垣方言のアンキに対応する。㉖人数（にんじゅ）ー仲間。組の者。沖縄方言のニンジュ、シンカに同じ。㉗やつていらー接続詞。～であれば。㉘まーたきー同じように。同等に。「たき」は丈で、この場合、数量、体積、能力等をいう。㉙ていぐみー手組み。段取り。㉚さーていー接続詞。さて。㉛でいらー接続詞。では。㉜いーー良い。充分である。㉝あいー感動詞。あ、おや。㉞あうー連れ。道連れ。例えば、山に薪を採りにいくとき、病人の看護を一晩中する時など、一人で行動するのが心細い時に一緒に行動する連れをいう。㉟つきー付けて。㊱すーりー連れて。沖縄方言のソーティ、石垣方言のサーリに対応する。㊲すくりー準備し。石垣方言・沖縄方言のショーリに対応する。㊳にびさり おーるー遅くいらっしゃる。行動がいつも遅れがちでいらっしゃる、の意。㊴ぶらなー～いなくては。～いてほしい。否定の形で願望の意を表している。㊵らんまー～よりは。比較を表す。㊶たぶりばいー～してくれるでしょうね。「たぶり」は呉れ、下さり。「ばい」は、～だろうね。推量であるが、推量したことについて、聞き手の同意を求める気持ちがある。㊷きぬりゃー長いこと。語形としては石垣方言のキノーレー（最近。この頃）に対応するが、意味に相違がある。㊸しーみらなだらーしてみていないので。してないので。「みらな」は補助動詞「みる」（見る）の未然形「みら」に打ち消しの助動詞「な」の付いた形で、～みない、～を経験していない、の意。「だら」は接続詞で、～なので、の意を表す。㊹しーりかーりー散らかつて。散乱している状態をいう。㊺かままー鍛冶屋の窯。材料となる金属を入れて焼くためのもの。㊻つくしんー置く物も。「つくし」は「つく（置く）+し（もの）」で置く物。ここでは鍛冶神にお供えする供物。「ん」は「も」で係助詞。㊼ありどうるぬー「あり（有り）+どう+うる（居る）+むぬ」（有りぞするものを）のつづまった形。有るのだが、無ければならないが、の意。㊽むちうりきんよーさー持って来ているだろうね。「よーさ」は、～だろうね、の意を表す連語。㊾うしりゃー差し上げなさい。石垣方言のウサイリャ、沖縄方言のウサギレーに対応する。㊿じゅーー感動詞。さあ。どうぞ。物を目上の人に差し出し進める時とか、目上の人を促す時などに用いる。㊿かいびー良き日。「かい」は形容詞「かいはーん」（美しい。立派である。良い）の語幹。㊿なー助

詞。～に。ここでは時間を表している。⑤③おーかつ・なーかつー大鍛冶・長鍛冶。鍛冶を讃えた表現で、立派な鍛冶、即ち、鍛冶が見事に成功するよりの願望の込められた表現。⑤④すすさでいーしよう。 「すすさでい」は ssadi の表記。ッサは動詞スンの未然形で、志向を表し、～しよう、の意。「でい」は助詞。～と。⑤⑤おーかま・こーかまー大窯・小窯。鍛冶屋の窯の美称。⑤⑥おーふくいぬまいー大ふいごの前。ふいごに対する敬称で、ふいごを神として表現したもの。偉大なるふいご様。鍛冶神様。「まい」は、尊敬の意を表す接尾語。⑤⑦いびーくべ。薪を竈にくべるのにもイピンという。ここでは農具の原材料となる鉄の固まりを窯に入れることをいう。⑤⑧にはばんー煮ても。ここでは、鉄の固まりを窯で焼いても、の意。石垣方言のネーサパンに対応する。⑤⑨ままがぎーままで。「がぎ」は助詞。～で。bo:gagi tataki (棒で叩き) のように手段も表す。⑥⑩にんずんからどー人数からぞ、すなわち、人数分を。⑥⑪ていだいー奢り。もてなし。饗応し。⑥⑫んー感動詞。はい。目上の者が目下の者に対して、物を進めたり、動作を促したりする時に用いる。⑥⑬ばららっていー擬態語。動作が勢い良く行われるさまの表現。⑥⑭ぶーばふー擬態・擬声語。ふいごから勢い良く空気が送られていくさまの表現。⑥⑮みーだがやー未だかな。「みーだ」は未だで、石垣方言のメーダ、沖縄方言のナーダに対応する。「がや」は、～だろうかな、の意を表す終助詞。疑問の終助詞「が」に間投助詞「や」の付いたもの。⑥⑯ぬすたるーどのような。いかなる。石垣方言のノースタに語形的には対応する。⑥⑰くーにゃんー語義未詳。この狂言では、金槌をうちふるいながらいう。⑥⑱みんー耳。ここでは鍬の刃の反対側にある、柄をすげるために付けられた半円形の部分。⑥⑲じょうぶにー立派に。首里方言でも文語で立派、申し分のないことをジョーブンという(『沖縄語辞典』参照)。⑦⑰あいやなでいんー言わなくても。「なだ」は動詞の未然形に付いて、～しなかった、の意を表す。「でいん」は接続助詞。～でも。⑦⑱ばららーばふー擬声語。火のついた薪や赤く焼けた鉄などを水に入れたときにでる音の表現。⑦⑲いー感動詞。ああ。おお。⑦⑳まりたるー生まれた。立派に出来た。⑦㉑かつー鍛冶。ここでは鍛冶でつくり出された品物。⑦㉒やっさー～だわい。⑦㉓ふつー口。ここでは、鍬の刃。鍬の先にあたることからの名であろう。⑦㉔きさー感動詞。あ痛い。熱い物に触れたり、手を何かに打ちつけたり、挟みつけたりなどして強烈な痛みを感じたときに発する。痛いのを大げさに言うときに用いる。アガーよりも強い表現。⑦㉕かつまばーどー掴まえたらこそ。掴まえたら。⑦㉖白々(すすい)ぶりどー あいぶるでいー白々としていると。白々と居って有り居ると、が直訳。ここでは、白くしているので冷えていると思って渡したのだよ、くらいの表現であろう。⑦㉗すまだぎばらはりるんがやーしのけていけるだろうと。「すまだぎ」は、しのける。しおおせる。「ばらはりるん」は、行かせられるが原意で、～していける。「がや」は前出。～だろうかな。⑦㉘しかーいとーしかと。まことに。⑦㉙みーばいゆー有り難うございます。石垣方言のニフフェイスーに対応する。⑦㉚きむ入りー肝入り。心を込めること。⑦㉛うちたぶりりばいー打って下さってあるからな。打ってくれてあるからな。「たぶりり」の後ろの「り」は動詞の連用形について理由を表す。「ばい」は終助詞で、～な。⑦㉜あ



いゆーいうのか。「ゆ」は、～か、の意。⑧うるざー卑称。こいつ。⑨かなあいつつー金相槌。鍛冶道具の一つで、大型の金槌。⑩みなーいま。石垣・沖縄方言でナマ。⑪いはずぶんー言い分。言い方。「ずぶん」の意は不明。⑫いきさいー行きがけ。ついで。ここでは、かえりがけ。⑬にきしていーあがって。ここでは、お茶をお飲みになって。石垣方言のシコーリ、多良間島方言のンキヤギに対応する。i: niki wa:ri (御飯をお上がりになっていらっしやい) などと使う。⑭ぬばいどうやりうりゃーいかがですか。⑮びゅんぐー「どんぐびゅんぐ」と覺語として用いられる。語義不明。⑯しずみまるばひしていー片付けてしまって。「まるばひしてい」は動作が勢い良く行われることをいう補助動詞「まるばす」の接続形。⑰びーどうるぬー酔っていますので。「ぬ」は理由を表す助詞。⑱みすくー用心してゆっくりと。⑲残りだつきんどらー残っているの。「つきんどら」は、～だから、～なのでの意。原因・理由を表す連語。⑳飲んまるばへーなー飲み干してしまおうか。「まるばへー」は前出の「まるばひてい」の異活用。「な」も前出。～しようか。～か。㉑ざーぶんー擬態・擬声語。水や酒などが瓶などの容器の中で揺れるさまの表現。㉒くすなめー後ろのあたり。背中の辺り。㉓すぶったらひねーなだつきんどらー濡らしてしまったので。「すぶったらひ」は、ぬらして。「ねーなだ」は、直訳すると、～してない。即ち、～してしまった、の意。

### (3) 田耕しい (たーかいしい)

総代	我 (ば) んどら	古見 (くん) ぬ	私が古見の
	総代 (すーだい) ゆー		総代でございます
	今日から	又 田あるな	今日からまた 田の荒打ち
		① すー 時期 (ずぶん)	をする時期に
	なりだつきんどら		成りましたので
	我 (ばー)	使 (つかい) ぬ	私の使いの者 (使用人) 達
	者 (むぬ) 達 (きゃー)	ば 呼び	を呼んで
	田あるな	しみるんでい	田の荒打ちをさせようと
		かい あるくゆ	このように歩いています
	——幕内に向かい呼びかける——		
	蒲戸 (かまだ)	おー	蒲戸 はい
	津久利 (つくりゃ)	おー	津久利 はい
	松 (まつあ)	おー	松 はい
	② だんでい	出 (い) でいきみり	さっさと出て来てごらん

蒲戸・津久利・松

おー くゆーなら あざま<sup>③</sup>  
 はい 御機嫌いかがですか  
 おじさん  
 総代 んー みしゃんさー  
 んー 元気だろうね  
 だはん 知るとるなー<sup>④</sup>  
 君達も知っているように  
 今日(きゆ)から 又 田あるな すー 時期 今日からまた 田の荒打ち  
 (ずぶん) なりだつきんどう をする時期に なっている  
 から  
 我が 与那田大枡(ゆなだうぶまそー)  
 私の与那田大枡(の田)を  
 うり 耕(かいひ)まるばひしてい 行って ぱっと耕して  
 くーよー 来いな  
 三人 おー 我な うり  
 はい 私は行って  
 じょーぶに 耕ひまるばひしてい 立派にぱっと耕して  
 くーにら あざま 来ましょうね おじさん  
 総代 じょーぶに 耕ひしていくーな 立派にぱっと耕して来いな  
 あざまん 昼間(びすま)がい<sup>⑦</sup> おじさんも昼間には  
 まーるまーるし おーるぬ<sup>⑧</sup> 廻り廻りして来られるつも  
 りだから  
 よー 昼間寝(びすまにび)なだ すーな いいか 昼寝などするな  
 三人 おー はい  
 ——総代を先頭に幕内に入る——  
 蒲戸 津久利(つくりゃ) 火種(びんどらん)<sup>⑨</sup> 津久利は火種を  
 つきむち 点けて持ちなさい  
 津久利 おー はい  
 蒲戸 松(まつあ) ふたでいるな 松は蓋付き籠に  
 飯(い) ふない むち<sup>⑩</sup> 飯を入れて持ちなさい  
 松 おー はい  
 ——といいながら、幕の中から出てくる——  
 蒲戸 とー くま 津久利(つくりゃ) さー 此処だ 津久利は  
 田(た)ぬ 水口(みずふつい) 開きしていく<sup>⑪</sup> 田の水口を開けて来い  
 津久利 おー はい

——舞台前の方に進み、田の畦を切る仕草——

	だーぶる だーぶる	ダブル ダブル
蒲戸	松 (まつあ) ふたでいるん ぴきさいり よー 高々 (たかたか) ぴきさうな うまな 犬 (いん) ぬ ざまんぐりあるぎだるぬ	松は蓋付き籠を引き提げよ いいか 高々と引き提げな いと 此処ら辺に 犬が迷 い歩いてたからな
松	おー	はい

——弁当かごを木にかける——

津久利	とー 開きゃん	さー あけたぞ
蒲戸	とー でいら 東あつつあんがい 着きあーらしゃーどー	さー では 東の畦に 着き勝負だぞ
津久利・松	あいどー	そらだぞ

——三味線、いき離れ節に合わせて耕す——

津久利・松	あー 休 (ゆー) くい 休くいどう なる	あーあ 休み 休みしてし かできない
-------	-----------------------	-----------------------

蒲戸 ——すかすように——

	えーえー つまな あったる くとぅぬどう	おいおい 何処にあった事 が
	田 (たー) ば びとぅばかたんが 耕 (かい) ひしてい	田を一パカだけ 耕して
	休 (ゆー) どう くーでい ありゃ	休むということがあるか
津久利・松	だーん 休くいーりゃ	あんたもお休みなさいよ
蒲戸	えーえ めーびとぅきばんな きばりしてい	おいおい もう一気張りは 気張って (それからなら)
	飯 (いー) ん 食 (ふあ) い	御飯も食べ
	煙草 (たばぐ) ん 吸 (ふ) かばどう	煙草も吸っても
	美味 (まーは) れんゆー	美味しいというものだよ
津久利・松	立ちぶり 飯 (いー) ん 食 (ふあ) い 煙草 (たばぐ) ん 吸 (ふ) かばん 美味 (まは) ん とぅくーとぅ 座 (び) じぶり	立っていて 御飯を食べ 煙草を吸っても美味しいか ちゃんと座っていて

	飯（いー）ん 食（ふぁ）い	御飯も食べ
	煙草（たばぐ）ん 吸（ふ）かばどう	煙草も吸ってこそ
	美味（まは）れんゆー	美味しいというものだ
	だーん 休いおーりゃ	あんたも お休みなさいよ
蒲戸	ぴらつかぬ 者達（むんきゃ） 寝（び）しゃーな <sup>21</sup>	怠け者達は 寝ているよ
	我一人（ばーたんが）がぎ 耕（かい）ひまるば	俺一人で えい 耕して
	ひ みしらー	みせよう
津久利・松	ちー	ちー（へへへ）
	——いき離り節に合わせて蒲戸一人で耕す——	
蒲戸	いー 木ばいぬ 先（ふつ） ぼるむんどう <sup>23</sup>	おっ 木鋤の刃先を割る物 が
	ありゃんゆー	あるよな
津久利・松	ぴらつか 木ばいぬ 先 ぼりっしば <sup>24</sup>	怠け者め 木鋤の刃先を割 ったなら
	明日（あつぁ）から 遊ぶんなー <sup>25</sup>	明日からは 遊ぶのかい
蒲戸	えーえ くまな 抱ぎばん 抱がるぬ <sup>26</sup>	おー おー 此処には抱い ても 抱けない
	大石（うぶいし）ぬ ありば	大石があるから
	我が 三人（みすたん）なるがぎ	俺たち三人で
	出（いだ）ひ捨（し）ていでいら ぬばいりゃー <sup>27</sup>	出して捨ててしまおうよ
津久利・松	あつたるむのー だー 物（むぬ）どう <sup>28</sup>	そんな物は あんたの物だ
	やる	
	だー 出（いだ）ひ 捨ていりゃ	あんたが出して捨てなさい
蒲戸	ぴらつかぬ 者達（むぬきゃー） 寝（び）いしゃなー	怠け者達は 寝ているよ
	うりん 我たんががぎ 出ひみしら	これも俺一人で出して見せ よう
津久利・松	あっぱ まいちゃん だー たますどー	お母さんの下履きもあんた のものだよ
蒲戸	——三味線に合わせ石を取り除きにかかる。石を動かす動作をして——	
	みーだ 動（うが）ぬばんゆ	未だ動かないことよ

- 津久利・松　　みーだ　動ぬでい　あいやんなー　　　　　　未だ動かないということが  
有るものか
- 蒲戸　　——三味線の終わる頃、石を取り除く動作。勢い余って、ひっくり返る——  
田（たー）ぬ　み中（なか）な　転びせんゆ　　　　田の真ん中に転んでしまっ  
たよ
- 津久利・松　　びらつか　田ぬ　み中な　転び　　　　　　怠け者め　田の真ん中に転  
んで
- 人ばつかはー  
　　　　　　　　<sup>29</sup>
- 蒲戸　　——掘り出した石を洗う——  
　　　　　　　　人に笑われるよ
- 津久利・松　　くぬ　ぷりむのー　石（いし）でい　　　　この馬鹿は　石だと  
出（いだ）ひしてい　　　　　　出して
- 何（ぬー）どう　洗（あら）いりゃ　　　　　　何を洗っているか
- 蒲戸　　——洗った石を確かめるように見て、驚きの表情で——  
いー　石でい　出（いだ）したら　黄金（くがに）　おーっ　石だと出してみた  
ゆん　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ら黄金だ
- 津久利・松　　えー　黄金（くがに）　でいら　　　　　　えー　なにっ　黄金だと  
　　　　　　　　<sup>30</sup>  
三人（みすたん）なりぬ　むぬどう　やる　　　　　　（これは）三人の物だ  
——と言いながら蒲戸の〔方へ〕起き上がって寄る——
- 蒲戸　　えーえ　つまな　あつたる　くとうぬどう　　　　おいおい　何処にあった事  
が
- くまな　抱ぎばん　抱がるぬ　大石（うぶいし）　此処に　抱いても抱けない  
ぬ　ありば　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石があるから
- 三人（みすたん）なりがぎ　出（いだ）ひ　　　　三人で出して捨てようと言  
捨（してい）らでい　あいば　　　　　　　　　　　　ったら
- あつたる　むのー　だー　むんどう　やる　　　　そんな物はお前の物だ
- だー　出（いだ）ひ　捨（してい）りゃでい　　　　お前が出して捨てろと  
あいしてい　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　言って
- ばーぬ　出（いだ）ひおーったら　　　　　　俺が出したら
- 三人（みすたん）なりぬ　物（むぬ）<sup>31</sup>どう　やる　三人の物だ（と言うのか）  
うるざ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　この野郎

津久利・松 きさから だー 出(いだ)ひ  
捨(してい)<sup>⑳</sup>りでい  
あいだろ

蒲戸 えーえ くまな 我が 三人(みすたん)なるが  
ぎ  
言(いー)くんなしー ならなだついきんどらな  
<sup>㉑</sup>

登(ぬぶ)り 総代ぬ あざま くゆみ

総代ぬ あざまんがい  
かたずきしみだら ぬばいりゃ  
<sup>㉒</sup>

津久利・松 あいしん みしゃどるる

蒲戸 あいし みしゃんでい 思(うむ)りるん

津久利・松 んー

蒲戸 ぴらつかぬ 者達(むぬぎゃ) 後(あとう)か  
ら 来(く)わーな

津久利・松 あいや ならぬ

——三人、舞台をまわり、上手の方に向かい——

三人 あざまー あざまー

総代 えー きいばりしてい きゃん

三人 おー

松 田(たー) 耕(かい) したら 黄金(くがに)  
とらみんゆー あざま

総代 ふんー だはんがら 黄金(くがに)ぬ  
とらみらりでい ありゆー  
<sup>㉓</sup>

蒲戸 田 耕ひしたら 黄金 とらみんゆー あざま

総代 くれー 正事(しよーくとう) どう やる  
——総代、黄金を受け取り確かめるように見て、驚いたように——

さっきから あんたが出し  
て捨てろと  
言っていたよ  
おいおい 此処で俺たち三  
人で  
言い合いをしてもどうしよ  
うもないから もう  
行って 総代のおじさんを  
訪ねて  
総代のおじさんに  
片づけさせてはどうだろう  
それでもいいさ  
それでいいと思うか  
んー  
怠け者達は後ろから  
来いよな  
そうは出来ない  
おじさん おじさん  
おーっ 気張って来たか  
はい  
田を耕していたら 黄金を  
探しました おじさん  
ふん お前達にも黄金が  
探せるということが有るの  
か  
田を耕していたら 黄金を  
探しました おじさん  
これは 本当の事かい

	いー くれー しょー黄金(くがに)どろ やりしってい 誰(たる)なーどろ あたりだら	おーっ これは 本物の黄 金だな(驚きだ) 誰が(この黄金に)当たっ た
松	我(ばぬ)なーどろ あたりだるゆー あざま	私めが当たっております おじさん
津久利	三人(みすたん)なるがぎどろ とろみるゆー あざま	三人で 探しました おじさん
蒲戸	我んどろ とろみるゆー あざま	私が探しました おじさん
総代	えー だは あい 言くんなし ならなだつきんどろなー  年(とろすい)さんかたし 年上(とろすいしじゃ)んがい かたずきしみだら むばいりゃ	ああ お前達は こんなに 言い合ってならないから もう 年の計算をして 年長の方に 片付けさせたらどうか
三人	おー どーでいん あいしたぶらならー あざま	はい どうぞ そうして下 さい おじさん
総代	あいしん みしゃんでい 思(うむ)りるん	そんなにしていと思うか
三人	おー	はい
総代	でいら 松(まつあ) 何才(いくつ) なるん	それでは 松は幾つになる
松	おー 我ぬにーら あざま 我ー 年(とろっ)さ 此(く)ぬ 島(すいま)ぬ 茶碗(ちゃばん)ぬ ぴていっつ 満(み)つあぬ けーから 生りどろるゆー あざま	はい 私ですか おじさん 私の歳は この 島が 茶碗の一つにも 満たない時から 生まれて下りました おじ さん
総代	ふーん だー やらびがやで 思いば  老人(ういびとろ)ゆんなー 松(まつあー)	ふん お前は子供かと思っ たら 年寄りだなあ 松よ

松 —誇らしげに—

おー

はい

総代 津久利（つくりゃー）さー

津久利は（どうだ）

津久利 おー 我ぬにーら あざま<sup>⑳</sup>

はい 私ですか おじさん

我（ばー） 年（とらっ）さ 此（く）ぬ 島ぬ

私の歳は この島が

天（ていん）とら 地（ずい）とら みーだ

天と地とが未だ

ばがらぬ けーから

分かれぬ時から

生りどらるゆー<sup>㉑</sup> あざま

生まれて下りました おじ

さん

——とこれも誇らしげな表情をする——

総代 ふーん だー ゆくぬ

ふん お前は 更に

老人（らいびとら）ゆんなー 津久利（つくりゃ）年寄りだなあ 津久利よ

津久利 ——あたかも黄金は自分の物と言わんばかりに——

おー

はい

総代 蒲戸（かまだー）さ

蒲戸は（どうだ）

蒲戸 ——静かに——

おー 我ぬにーら あざま

はい 私ですか おじさん

我（ばー） 嫡子（ちゃくっさー）

私の嫡子は

くいした 二人（ふたるっ）とら

こいつら二人と

とらすぬ人（ぴとら）ゆー<sup>㉒</sup>

同じ歳の人でございます

総代 ふーん だー 親（うや）だぎぬ<sup>㉓</sup>

ふーん お前は（この二人

の）親ほどの

兄（しじゃ）どら やりしってい

先輩であるんだなあ

くぬ 黄金（くがねー） だー 物どら やる

この黄金は お前の物だ

弟達（うとらどらきや）んがい ばがひなよー

後輩達に奪われるなよ

——と、蒲戸に黄金をわたして退場——

蒲戸 おー 黄金（くがに）ん いーりしば

おー 黄金も貰ったから

ぴらつかぬ 者（むぬ）きゃー

怠け者達は

後から 来（くわー）なー

後から来いな

——蒲戸も退場——



津久利・松 あいやならぬ

そうは出来ない

——先に帰ろうとする津久利を——

松 えーえー 此処（くま）い 出来（いでき）みり おいおい 此処に出て来て  
みろ

——と、引きずり出して——

だぬんざぬどう 休（ゆー）く 休（ゆー）くでい お前めが 休め 休めと  
言（あい）ぶり 我（ば）ぬまでい 言って 俺まで  
休（ゆー）くひ 休んで  
黄金（くがに） いーらぬさ うるざ 黄金を儲けさせないで こ  
いつ

久利 ぬー うるざ だぬんざぬ なにを こいつ お前めが  
休（ゆー）くいだらどう 休んでいたから  
我（ばぬ）ん 休（ゆ）くいおーたっる 俺も休んでいたのだ  
我（ばー） すぐ 下腹（すたばだ） 俺が 今 下腹を  
きりとらはんばー 蹴ってやろうか

——と、松を蹴る。松は津久利の足を引いて幕内に入る——

津久利 えー 待（ま）ち 待（ま）ち おい 待て待て

## 〔語注〕

①田あるな—田の荒起こし。田植えのための田打ちで、最初のもの。二度目をマトッナという。三度程打つが、回数を重ねるほど実りが良いという。②蒲戸・津久利・松—これらの名は出演者の名によって変わる。③あざま—おじさん。縁者、非縁者を問わず言う。④知るとるな—知っているとおり。「な」は、～に。⑤うり—下り。ここでは、行って。⑥く—にら—来ましようね。「にら」は、～しましようね、の意。語形的には石垣方言のネーラに対応するようだが、意味的にはずれがあるようである。⑦がい—助詞。～に。～には。⑧お—るぬ—いらっしゃるので。「お—る」は、いらっしゃる、おいでになる。「ぬ」は原因・理由を表す助詞。ここでは、来るので、の意。いわゆる自称敬語である。自称敬語は古見の狂言に時々みられるものである。⑨火種（びんどうん）—畑や山に出る時に持って行く。火持ちの良い木やフガラ（クログの皮の繊維）を縄になってそれを芯とした。⑩ふない—よそって。弁当を詰めて。⑪水口（みずぐち）—畦の一部を水落としの為に切って捌け口としたもの。⑫だ—ぶる—擬声語。「みずぐち」を切るために振るう鍬のたてる音の表現。⑬ふたでいる—蓋付きの籠。弁当などを入れる。⑭びきさうな—引き提げないといけない

よ。「な」は本来打ち消しの意を表すが、ここでは「～ないといけない」と軽い命令の意となっている。

⑮ざまんぐりーうろろして。うろついで。石垣方言のサマンドゥルン（さ迷う）に対応する。

⑯つきあーらしゃーどー着き勝負だぞ。「あーらしゃー」は勝負、競争。ここでは、西の畦から東の畦まで誰が早く田を打ち終えるか競争だ、の意。

⑰ぴとぅばかたんがー一区画だけ。「ばか」は、ここでは一人が田を打ち進む約1メートル20センチほどの幅をいう。大人が鍬を右、左の手に持ち替えて耕せる程度の幅という。「たんが」は助詞で、～だけ。

⑱休どぅーくーでいー「ゆーくい」（休み）を「ゆー」「くい」と分解し、それに「どぅ」と「でい」をつけたものという。普通は使わない。

⑲きばんなー気張りは。頑張りは。「きばん+や」の変化した形。

⑳とぅくーとぅーゆーくりと。ゆるりと。国語の「とくと」に対応する。

㉑寝びしゃーなー寝てしまえ。「な」は強意の終助詞。

㉒ちー感動詞。人をけしかける時に用いる。ここでは、頑張れくらいの意。動物（牛馬など）をけしかける時には *hija:* という。

㉓いー感動詞。おお。ああ。

㉔ぱりっしばー割ったので。「は」は確定条件を表す接続助詞。

㉕遊ぶんなー遊ぶね。ここでは「遊ぶことだね、あんたは」という程度の意。

㉖えーえー感動詞。おいおい。呼び掛けの語。後ろの方は、「何だと」くらいの意。ここでは怒気を含んだものとなっている。

㉗捨（し）ていでいらぬばいりゃー捨ててはどうか。捨てようではないか。「でいら」は、～しては。「ぬばいりゃー」は、～如何かの意。後ろにも「～しみだらぬばいりゃ」（～せしめたらどうだろうか）とでる。

㉘あつたるむのー当たったものは。「むのー」は「むぬ+や」の変化した形。

㉙人ばつかはー恥ずかしい。一般には「ばつかはー」だけでいいが、「人」をつけたのは、人に見られて恥ずかしい、と強調するためか。

㉚えー感動詞。おお。驚きの声。

㉛出（いだ）ひおーったらーお出しになりましたら。自称敬語で、自身の行為を自慢した表現である。

㉜きさからー最初から。「きさ」は、確定している過去の一時点を言い、不確定な過去の時間は言わないという。石垣・沖縄方言のキサ、キッサに対応する語。

㉝言いくんなー言い合い。「くんな」は対決、闘いの意を表す接尾語。石垣方言のクナーに対応する。

㉞がいー助詞。～に。

㉟がらー助詞。～にも。

㊱さんかたー算方。計算。ここでは、年を数えてほどの意。

㊲茶碗ぬ〜茶碗一つに満たない、茶碗の中にすっぽりと入る、すなわち、茶碗程の大きさもない。島は成長し大きくなるという想念のあることが分かる。

㊳津久利さー津久利よ。「さー」は、ここでは「(おまえは) どうだ」「(お前の) 番だ」という意をあらわしている。

㊴天（てーん）とぅ地（ずいー）とぅ〜大底氏は、天と地とが未だ分からない、すなわち天と地とが不分明の時の意であろうか、とするが、あるいはここは、天と地とがまだ分かれぬ時をいうかとも思われる。『古事記』の「天地初発之時」という想念と重なるものであり、宇宙の起源を語る神話の断片と目され、貴重である。

㊵くいしたーこいつ達。こいつら。ここでは、津久利と松。

㊶とぅすぬ人（ぴとぅ）ー年の人。同じ年の人。同年の人。

㊷きりとぅらはんばー直訳すると、蹴って取らせてやろうぞ。蹴りとばしてやろうか。

## (4) 亀組

——三味線の伴奏があって、頭大主、出てくる——

頭大主	ほー 今日（ちゅう） 来（ちゃ）る 者（むぬ）や 頭大主（かしらうふぬし） 今日ぬ ① 良かる 日に 今日ぬ まさる 日に 照る 太陽ん ちゅらさ 押す 風ん しださ かしら浜 うりてい 魚ゆ 釣らにわ しまん	ほー 出て来た者は 頭大主 今日の良き日に 今日の勝る日に 照る太陽も心地良く 吹く風も涼しい（ので） カシラ浜に 下りて 魚を釣らないではいられな い。
-----	--	---

——三味線伴奏が入り、頭、浜に向かう——

ほー 頭浜ていすや くまどう やっさみ なまぬ 時ん 足 ゆどうでい 魚（いゆ）ゆ 釣らにわ しまん ②	ほー カシラ浜というのは 此処であるぞ 今は 足を止めて 魚を釣らないではいられな い。
---	--

——亀が釣れる——

ほー 魚でい 釣りば 亀ぬ くあいみせん なまぬ 時（とうち）ん 足早（あしはや）みてい 亀 けーさにわ しまん ③	ほー 魚だと釣れば 亀が食いついてこられた 今の時は 足を早めて（急いで） 亀を返（帰）さないといけ ない
--	--

——幕中から女神が現れる——

女神	いえー 女（いなぐ） いちやる 事（くとう） あていどう うまに うたが よーよー 我みや くぬ 島（しま）ぬ 者（むぬ）ん あらん	おい 女子よ 如何なる 事（理由）があって 此処に居たのだ いいか 私は この島の 者ではないぞ
----	--	--

世間（しけー）ぬ 者（むぬ）ん あらん みなや島ぶいうじ神（がみ）ていすや ④	この世の者でもないぞ ミナヤ島ブイウジ神という のは 私であるのだ
我みどろ やゆる	
頭大主 ほー みなや島（じま）ぶいうじ神（がみ）てい すや	ほー ミナヤ島ブイウジ神 というのは
いちゃる 事（くとう） あていどろ	如何なるわけがあって
わか なに うくよーが ⑤ ⑥	私の縄（釣り糸）に掛かっ てこられたのです
女神 みりく世（ゆ）ぬ 主（ぬす）でむぬ なる世ぬ 主でむぬ みりく世ば むちやい なる世ば むちやい 物種子（むぬだに）ゆ 譲（ゆじ）ら 米種子（くみだに）ゆ 取（とろ）らさ	弥勒世の主であるから 稔り世の主であるから 弥勒世を持って 稔り世を持って 物種子を譲ろう 米種子を取らせよう
頭大主 うーとーとろ	おお 尊
女神 夏水（なつみず）に うるし 冬水（ふゆみず）に 植（い）びおり やいに世ぬ ならり 来夏世（くなつゆ）ぬ みきり 首里天（すゆいていん）じゃなし前（め）に 御初俵（うはちだーら） 上（あ）ぎてい 拝（うが）でい している ⑦	夏水に下ろし 冬水にお植えなさい 来年の年の稔りは 来夏世の実りは 首里の国王様に 御初の俵を上げて 無上の喜びとなる
頭大主 うーとーとろ	おお 尊
今日ぬ うりしきや たっている くとうん ならぬ 浜（はま）ぬ まさぐ	今日の嬉しさは 譬える事もできない （その喜びは）浜の真砂 （のようで無上である）
我みん うとうむ からまぎてい ⑧	私もお供を勤めて
踊（うどろ）てい 戻（むどろ）てい いこーや	踊って 戻って行こうよ

## ——三味線に合わせて女神の後から踊りながら退場——

## 〔語注〕

①今日（ちゅう）来（ちゃ）る者（むぬ）や—語に忠実に訳すると「今日来た者は」となるが、この句は、組踊の冒頭に登場する人物がかたる常套句「出様ちやる者や」（でいよ—ちやるむぬや・今、登場した者は）の変化したもの。②ゆどっでい—淀んで。足をとめて。③け—さにわ—ひっくりかえさねば。あるいは「海に帰さねば」かとも思われるが、大底氏によるとこの句は怒った様子で演ずるので、前者と思われるという。④みなや島—どこの島の名か不詳。「みなや」は他界・ニライカナイのニライの変化した形と思われる。女神は海中の他界「みなや島」から五穀の種子を携えて、古見に豊饒をもたらすために来たということからすると、「みなや島」はニライ島とみてよいだろう。⑤わかな—我が縄、即ち、自分の釣り糸。⑥うくよ—が—食うか。ここでは、魚が餌に食いつき、釣針にかかることをいう。⑦しでいる—瞬で。生まれ変わる。転じて、生まれ変わる程の喜びを喜び祝うの意となる。⑧からまぎてい—勤めて。沖縄方言のガラミチュンに対応する。

## 注

注1 沖縄県立芸術大学附属研究所助教授

注2 拙稿「八重山の風土・歴史・文化」（『沖縄芸術の科学』第2号 1989年3月）参照。

注3 森田孫栄氏によると、八重山ではニサイキャハン（二才脚半）と称するという。

## 〈付記〉

本稿は大底朝要氏の御協力によって成ったものである。記して感謝の意を表したい。